再び「福知山線・事故現場」に向かう

複雑な思いで「浜つばめ団地」をあとにして、昨年4月25日のＪＲ西日本の福知山線の事故現場に向かう。ＪＲ尼崎駅の周辺は、工場跡地の大規模な再開発により、高層マンションが林立するようになった。事故現場あたりは、多くの工場や中央卸売市場などがあり、駅周辺とは雰囲気がまるで違う。事故当日には、工場や市場の従業員などが被害者を懸命に救出する様子が報じられていた。

例のマンションが見えてくる。いまは人が住んでいないと思うが、ガードマンが慰霊に訪れる人たちを案内していた。昨年事故から1ヶ月余り後に行ったときには、周辺はかなり混雑していた。この日は閑散としていたが、大学生らしい人などが慰霊に訪れていた。列車が激突したマンションの駐車場の柱は、昨年は深く傷ついていたが、色が塗られていた。しかし、ここで多くの人が亡くなり、傷ついて今も病床にあることを考えると、胸が締め付けられる思いであった。

マンションの向こうの白いテントのなかに慰霊台がおかれていた。ＪＲ西日本の若い職員3人が丁重に振舞っていた。わたしも事故当時のことを思い起こしながら手をあわせた。あのときのように急カーブの線路を列車がゆっくり入ってきた。運転手の顔もすこし見ることができた。事故の「反省」からか、スピードはかなり緩やかであった。

あれから1年余り経ったが、その間にも数多くの事故や事件が発生している。再び現場を訪れて、あらためて日本社会の「現実」を考えさせられた。

（2006年7月17日　記）